

第 13 回クラシックを楽しむ会

2014 年 8 月 17 日 (日) 18:30~21:30

喜歌劇「ウィーンかたぎ」(J・シュトラウス 2 世)

会場等：メルビッシュ音楽祭 2007、オーストリア、
ノイジードラー湖特設ステージ 2007 年 8 月

楽団等：メルビッシュ音楽祭管弦楽団、
同合唱団、同バレエ

指揮：ルドルフ・ビーブル

演出：マクシミリアン・シエル

振付：ジョルジョ・マディア

出演：ライナー・トロスト

ノエミ・ナーデルマン

マルガレータ・クロブチャール

ダニエル・セラフィン

ルネ・シュッテングルーバー

ハラルド・セラフィン

アレクサンダー・グリル

フレディ・シュヴァルトマン

その他

ツェドラウ伯爵 (小国の大使)

ガブリエーレ (ツェドラウ伯爵夫人)

フランツィスカ (踊り子、ツェドラウ伯爵の愛人)

ヨーゼフ (ツェドラウ伯爵の従僕)

ペピ (仕立屋の娘、お針子、従僕ヨーゼフの恋人)

ギンデルバッハ侯爵 (小国の首相)

カグラー (フランツィスカの父親)

メッテルニヒ侯爵 (オーストリア帝国外相)



メルビッシュ音楽祭 2007 「ウィーンかたぎ」第 2 幕

ワルツ「ウィーンかたぎ」の成功と喜歌劇の計画

ヨハン・シュトラウス 2 世がオーストリア大公女とバイエルン王子の婚礼の祝賀舞踏会のために 1873 年に作曲したワルツの名曲「ウィーンかたぎ」が大成功。このワルツが大好評だったことから自身の旧作ワルツやポルカなどを集めて同名の喜歌劇を計画して作曲に着手。しかし、シュトラウス 2 世が 1899 年に死去したため友人の指揮者アドルフ・ミュラーが完成させた。

喜歌劇「ウィーンかたぎ」について

19 世紀初頭、ナポレオン戦争後の体制を決めるウィーン会議を背景に、喜歌劇「こうもり」風の人違いコメディに、同じドイツ語圏ながら野暮なドイツ人と粋なオーストリア人の地方気質を絡ませ、統一ドイツから除外された斜陽オーストリア帝国の郷愁も反映。ワルツ「ウィーンかたぎ」の他、美しき青きドナウなど馴染みの曲が次々に歌われる。

メルビッシュ音楽祭 2007

この公演はメルビッシュ音楽祭の 50 周年記念公演。豪華キャストと洗練された演出でますます人気を集めている。1990 年代から 10 数年この音楽祭を率いてきた名総監督ハラルド・セラフィンは 2012 年に勇退、名指揮者・音楽監督のビーブルも 2008 年に退任。なお、ダニエル・セラフィンはハラルドの息子、親子で共演。



2007 年公演ラベル付きのワインとグラス

第 14 回クラシックを楽しむ会(予告)

タイトル：歌劇「トスカ」(プッチーニ) メトロポリタン歌劇場

9 月 21 日(日)18 時開場、18 時 30 分上映開始

名指揮者シノーポリと、スター歌手ドミンゴ、ベーレンス共演の見事なメト・オペラ。

10 月以降、R.シュトラウスの歌劇「アラベラ」(またはビゼーの歌劇「カルメン」)、ロッシーニの歌劇「セヴィリアの理髪師」、ヨハン・シュトラウスの喜歌劇「こうもり」等を予定。

【時と場所】

1815年3月頃のウィーン（前年の9月から延々とウィーン会議開催中）

【第1幕】ウィーンのデーブリングにあるツェドラウ伯爵の別荘

ドイツの小国ロイス・グライツ・シュライツの大使ツェドラウ伯爵がウィーンに赴任して3年。野暮な堅物の伯爵が生粋のウィーン娘ガブリエーレと政略結婚したが伯爵夫人は実家に戻り別居状態。伯爵は郊外の伯爵夫人所有の別荘に、愛人フランツィスカ（踊り子）を囲っているが、足が遠いている。

伯爵の従僕ヨーゼフは本国からの首相訪問を知らせに別荘を訪ねるが伯爵は留守。逆に愛人フランツィスカに伯爵の居所を問い詰められる（「**アンナ、アンナ**」）。

そこへ伯爵が帰館、怒るフランツィスカをなだめ（「おはよう、いい子ちゃん」）、その舌の根も乾かぬうち、伯爵は従僕ヨーゼフに街の仕立屋のお針子をモノにしたいと相談。ヒーツィングの夜祭りに誘い出せるか、手紙の代筆は引き受けると手慣れたヨーゼフ（「**それじゃ始めてくれ**」）。

そのお針子がまさかヨーゼフの恋人ペピとは知るよしもない。手紙を手に伯爵が出掛けると、ペピが注文のドレスを届けにやってくる（「**こんにちは、旦那様**」）。

本国からやってきた首相が辻馬車の御者と言い争う声。首相はフランツィスカの父親カーグラールと話したせいもあって、愛人フランツィスカを伯爵夫人と思い込む（フィナーレ「**彼女だ**」）。

首相は伯爵の浮いた噂を憂慮していて、最近の行状は目に余ると伯爵夫人を慰めたつもりだが、当の愛人フランツィスカが怒ってしまい大困惑。折しも夫の浮気の真相を確かめに来た本物の伯爵夫人を愛人と勘違いした首相は、呑気に帰ってきた伯爵と、戻ってきた愛人フランツィスカの前で、気をきかすつもりで伯爵夫人を自分の妻と紹介してしまい、一同大混乱のまま幕。

【第2幕】ビトヴスキー伯爵邸の夜会

お針子ペピは恋人の従僕ヨーゼフと些細なことで喧嘩。伯爵の誘いに乗って夜祭りに行くことにする。一方従僕ヨーゼフは伯爵の愛人フランツィスカから、伯爵の浮気現場を押さえるため夜祭りに同行するよう言い付けられる。ビトヴスキー伯爵の紹介でようやく身分が明らかになった伯爵夫人に、愛人と勘違いした首相は平謝り。しかし伯爵夫人は首相に伯爵の浮気現場を見に行きましょうと夜祭りへの同道を求める。こうしてパートナーを組み替えた3組のカップル、お針子ペピ（従僕ヨーゼフの恋人）と伯爵、従僕ヨーゼフと伯爵の愛人フランツィスカ、伯爵夫人と首相が誕生。

【第3幕】ヒーツィングのカジノの庭園

人々が集まり夜祭りを楽しんでいる（「**グラスあげ歌え**」、「**ウィーンの歌を奏でるなら**」）。そこへ様々な思惑を秘めた3組のカップル、伯爵夫人と首相、愛人フランツィスカと従者ヨーゼフ、伯爵とヨーゼフの恋人ペピがやってくる（「**遠慮せずこちらへいらして**」）。

主人思いのヨーゼフが伯爵に忠告すると、伯爵は「彼女」のことは頼むぞと言い残して立ち去る。ヨーゼフがその彼女の顔を拝みにいけば、最愛のペピ！大喧嘩するのは愛あればこそ。

一方、伯爵夫人と愛人フランツィスカは互いに身分を明かし、協力して浮気な伯爵を懲らしめる算段（「**じゃあ力を合わせて**」）。何も知らぬは伯爵ばかり。恋人ペピも愛人フランツィスカも、帰るところは恋人のもと。恋も浮気もすべてはウィーン気質、優しく許しましょうという伯爵夫人の一言で、伯爵と伯爵夫人、従僕ヨーゼフとお針子ペピ、首相と愛人フランツィスカ達が大団円。ウィーン気質をみんなで讃えながら幕を閉じる（フィナーレ「**ウィーンかたぎ**」）。

ウィーン会議

ウィーン会議とは、フランス革命とナポレオン戦争終結後のヨーロッパの秩序再建と領土分割を目的として、1814年から1815年にオーストリア帝国の首都ウィーンにおいて開催された国際会議。議長はオーストリアの外相メッテルニヒ侯爵。各国の利害が衝突して数ヶ月を経ても遅々として進捗せず、「会議は踊る、されど進まず」と評された。1815年3月にナポレオンがエルバ島を脱出したとの報が入ると、危機感を抱いた各国の間で妥協が成立しウィーン議定書が締結された。

架空の小国ロイス・グライツ・シュライツ

ウィーン会議当時、ドイツ中部地方に実在したのはロイス＝グライツ侯ハインリヒ13世が治めた小国。母は隣ロイス＝シュライツ侯ハインリヒ24世の娘。現在この地方はチューリンゲン州東部の田舎。